

# 迎賓館赤坂離宮各部屋の概要



彩鸞の間

**彩鸞の間** 「彩鸞(さいらん)の間」の室内の装飾は、19世紀初頭ナポレオン1世の帝政時代を中心に、フランスで流行したアンピール様式となっている。天井や壁は金箔が施された石膏の浮彫で装飾され、天井のヒダの様子は当時、遠征時の移動に使用したテントの天井を模したのになっている。東西には10枚の大鏡が配置され部屋を広く見せている。



羽衣の間

**羽衣の間** 「羽衣の間」はかつては、舞踏室として使用されていた部屋に相应しく、オーケストラボックスがあり、壁面のレリーフには楽器や楽譜などの装飾が施されている。中央階段を登った正面にあるホール、両側の壁は合わせ鏡になっており、どこまでも続く廊下のような、ひろがりのある空間を演出している。また、左右に飾られている油絵は、小磯良平の作品だ。



朝日の間

**朝日の間** 天井絵画の南北と壁の間には船に月桂樹、そして、天井絵画の東西と壁の間には、鎧に月桂樹と獅子(しし)頭が描かれている。獅子頭の眼は、部屋のどこから見ても見ている人の方を向いているように見える「だまし絵」となっている。壁に張られた京都西陣の金華山織の美術織物は三枚の反物をあわせて一枚にしている。合わせ目の模様がズレないように、すべて手織でつくられている。(現在工事中で見学不可)



花鳥の間

**花鳥の間** 部屋の装飾はアンリー二世様式と言われている。木目が美しい国産のシオジ材で板張りされた壁面は30枚の七宝焼きで装飾されていていずれも花と鳥の絵になっている、これらの七宝焼きは日本画家・渡辺省亭(せいてい)の下絵を七宝工芸家・濤川惣助(なみかわそうすけ)が数年間の努力によって作り上げたもので、わが国の七宝焼きの歴史でも最高傑作と言われています。大きな絵画のような見える正面壁画、実はゴブラン織風の綴(つづれ)織で、およそ800種類の糸を使い、手織で3年以上かけて織られたものだ。



(赤坂離宮迎賓館 前庭)